

国語だより その2

相良中学校 国語部

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露にぬれつつ



今日の一首は、「小倉百人一首」の一番、天智天皇の歌です。歌の内容は「稲刈り用の仮小屋の屋根は苫の目が粗いので、私の袖は夜露が降ってぬれ続けているよ」というものです。

「かりほ」は「稲を刈る」という意味と「仮の小屋」という二つの意味を持っています。訳すときには同じ言葉を別々の意味で、二回訳さなければなりません。「苫」は植物の茎を編んで作った「むしろ」のことです。仮の小屋なので、屋根の代わりにこれを何枚も重ねて雨よけにしたのでしょう。天皇も稲刈りをしたのでしょうか。

読書感想文課題図書レビュー①

『11番目の取引』アリッサ・ホリングワース／作 もりうちすみこ／訳



アフガニスタン難民のサミと祖父の生きる術であり、心の拠り所だった伝統楽器ルバーブが奪われた！買い戻すには1か月以内に700ドルが必要だ。サミは友だちの助けを借りて自分の持ち物で物物交換を始める。(帯の紹介文より)

海外の作家の作品の難点は、日本との生活習慣の違いに戸惑ってしまうところにある。取っつきにくいところもあるが、ここはひとつ「異世界冒険もの」のつもりで、「こんな風習もあるんだあ」と読み進めていこう。語り手でもあり主人公でもあるサミの奮闘を応援しながら追いかけていこう。きっと最後には大きな感動に包まれるはずだ。

大切なポイントは2つ。ひとつ目は、サミの心の深い部分に押し込められている記憶とルバーブのつながりだ。サミの苦しみや喪失感に寄りそうことができれば、感想文はぐっといいものになる。もうひとつはサミを取り巻く人々との関わりだ。サミのことをよく知らない友人たちは、サミの心に寄りそうことはない。それでも、彼らの存在がサミを勇気づけ、励まし、癒やしてくれる。

主人公が困難に直面し、それを乗り越える過程で多くのものを学び成長する(あるいは救われる)という、ド直球のストーリーだが、日本に暮らすみんなには馴染みのない、世界の知られざる一面を教えてください。読む価値アリ。



(伝統楽器ルバーブ)